

|                    |                             |
|--------------------|-----------------------------|
| <b>Title</b>       | ニュータウンにおける子どもの生活と文化(1)      |
| <b>Author</b>      | 藤本, 浩之輔                     |
| <b>Citation</b>    | 人文研究. 17 巻 6 号, p.528-554.  |
| <b>Issue Date</b>  | 1966                        |
| <b>ISSN</b>        | 0491-3329                   |
| <b>Type</b>        | Departmental Bulletin Paper |
| <b>Textversion</b> | Publisher                   |
| <b>Publisher</b>   | 大阪市立大学文学会                   |
| <b>Description</b> |                             |

Placed on: Osaka City University Repository

ニュータウンにおける

## 子どもの生活と文化 (1)

藤 本 浩 之 輔

### 1 はじめに

#### — 問 題 意 識 —

いわゆる「団地」の造成は、戦後のさしせまった住宅難の解決、産業構造の変化にもとづいた都会への人口集中に対応する住宅政策という点に、そもそもの発端があったことはいうまでもない。それが、単なる集団住宅地にとどまらず、現代日本の先端的現象のように言われたり、未来のコミュニティの象徴のように考えられるのは、それなりの理由があるようだ。団地が大規模化し、都市近郊に、住宅都市やニュータウン形式のものがつくられるようになるにつれ、それは、今まで日本には存在しなかった、まったく新しい居住環境であることがはっきりしてきたのである。

それまでは、丘陵地や田んぼだった無人の地に、突如として人口万を数えるビルディングの町ができあがる。幾何学模様に配列された白い建物、舗装された道、施設のとのった遊園地、手入れされた広い芝生や花壇…。周囲の農村と比較すると、あまりに違った環境であり、そこでは、いかにも近代的、合理的な生活が可能のように見える。そこに集まってきた人びとは、おし出されてきたとはいえ、都市の大企業や官庁に勤める、若い前途有望なサラリーマン層（いわゆる新中間層）である。彼らの家族は近代的小家族であり、生活様式も、意識もかなり違っている。ジャーナリズムは、団地族、団地っ子という形で風俗的な話題を提供する。そういう意味では、大規模団地の出現が、文化史的に大きな意味をもっていることは確かであろう。

今後も、大規模化した住宅都市、ニュータウンの建設はますますおしすすめられていくであろう。だが、果してそこに問題はないであろうか。

建設計画においても、現在のところ、住宅供給ということが至上要求であるため、建築学的な計画が中心で、社会学的観点からするコミュニティ計画や人間関係についての配慮はほとんどなされてはいない。また、団地社会における人間形成、とくに子どものパースナリティ形成といった問題については、なおのこと無配慮のまま残されているのではなかろうか。



人間のパーソナリティ形成において、直接的な生活環境、つまり地域社会がもつ意味は非常に大きい。団地が大規模化し、住宅都市とかニュータウンとよばれる形式のものになってくると、子どもたちの生活はまったくその中で完結し、外側の社会へ出ていくことはほとんどなくなる。たまにあったとしても、それは旅行者としてであって、生活者としてではない。その場合、もし、直接経験の環境として、ニュータウンの社会的、文化的条件が一般の社会に比してひどく特殊であり、かたよった社会であるとすれば問題は大きい。他の場所で人格形成をして移住してき、そして、毎日その外へ出ていくおとなにとってはそれほど問題にならなくても、その中で生まれ、一からパーソナリティ形成をはじめる子どもにとっては、こと重大である。

大都市近郊に続々と建設がすすめられているニュータウンは、子どもの生活をつつみこむ社会として、直接的な生活経験の環境として、どういう条件をもっているのだろうか。また、それらの条件は、子どもたちのパーソナリティ形成にとってどういう問題を投げかけるものであろうか。

あるニュータウンにおける社会・文化的条件と、子どもたちの日常の生活行動ならびに文化受容(マス・メディア接触)に関する調査にもとづいて、この問題を考えてみたいと思う。それは、今後建設されるニュータウンにおいて、その当局、学校、家庭などが、子どものパーソナリティ形成や教育という観点から配慮しなければならぬ諸問題の提起という意味ももつのである。

## 2 調査概要

### 調査対象地

調査対象地を選定するに当って、われわれはいくつかの条件を設定した。まず、今後建設されるニュータウンにおける子どものパーソナリティ形成や教育の問題を考えるための資料を得るという点で、それは、大規模な団地、あるいはニュータウン的スケールをもったものでなければならないということ。次に、その地で子どもたちが成長し、新しい環境に応じた生活と文化をつくりあげているようなケースが望ましい。したがって、建設時期の早い団地であること。第三に、公団当局や教育委員会や学校の協力が得られやすいということなどであった。

以上の条件に合致する対象地として、われわれは、大阪府<sup>ひらかた</sup>枚方市の「香里<sup>こうり</sup>ニュータウン」を選ぶことに決めた。

香里ニュータウンの概略を説明しておくと、それは、大阪市と京都市のほぼ中間にある枚方市の南西部に位置する。面積約 152 ヘクタール(約46万坪)のなだ



らかな丘陵地に造成され、自然の景観に富んでいる。宅地開発は1956年（S，31）に着工され、'62年4月（S，37）に完成。現在のところ、賃貸アパート、社宅、分譲住宅その他をふくめて約6,500戸（賃貸アパート約70％）の住宅都市である。周囲は小高い丘陵にかこまれ、小盆地を形成しているため、近隣の町や農村とはやや隔絶された状況にある。

ニュータウン内部におけるバス路線は発達しており、停留所11ヶ所、京阪電鉄の3駅（枚方市、枚方公園、香里園）へは、1.5km～2kmで結ばれている。大阪、京都の両都心への所要時間は大体1時間。ニュータウン内の公共施設は、市役所支所—1、市の診療所—1、派出所—1、郵便局—2、集会所—5、中学校—1、小学校—3、幼稚園—2、保育所—1、電話交換所（無人）—1。商業、サービス施設としては、銀行出張所—1、バス営業所—1、マーケット—4、店舗—48などが設けられている。

なおつけ加えておくと、「香里ニュータウン」というのは、住宅公団が用いている事実としての名称であって、それが欧米的な意味での「ニュータウン」の概念に合致するか否かは、この際、われわれは問題としていない。

#### 調査方法

今までにも、団地の住民や子どもに関する調査はかなりおこなわれてきたが、そのほとんどは団地のみを対象としたものである。その場合、ある結果がでて、それが団地の特性であるかどうか、また、団地のもつ特殊な条件に起因するものかどうかは明らかでない。そこで、われわれは、香里ニュータウンの対照地域として、枚方市東北部の農村地区（近郊農村）と大阪市内の住宅・小商工業地区を選定し、同一調査による比較研究という方法をとった。

調査は、その3地域の小学校、中学校の児童・生徒、ならびにその父兄が対象とされたが、本論においては、小学校児童とその父兄の調査に限って検討したいと思う。調査対象校をあげておくと、

- |            |                      |
|------------|----------------------|
| ① 香里ニュータウン | 開成小学校、五常小学校、香里小学校    |
| ② 近郊農村     | 津田小学校、菅原小学校、氷室小学校    |
| ③ 大阪市内     | 東住吉区北田辺小学校、阿倍野区丸山小学校 |

第1回の質問紙調査は、'64年の11月中旬、小学校5年生を対象としておこなった。第2回の調査は、'65年の12月から翌年の1月にかけて、前回の対象児童を追跡する意味で、6年生の児童とその父兄を対象としておこなった。調査票は学校を通して配布し、学校で記入させたり、家庭にもち帰って記入させるという方法をとった。その間に実施した調査は8種類におよぶ。香里ニュータウンの3



校には、ニュータウン外からの通学者もわずかながらふくまれているが、以下に示す集計結果の中では、それはもちろん除かれている。

いまのところ、これら諸調査の第1次集計の段階であり、観察、記録、テストなどのフィールド・ワークはなお継続中、ないし計画中である。したがって、ここに報告するのは、われわれの調査計画の一部であることを付記しておきたい。

### 3 ニュータウンの社会・文化的条件

団地やニュータウンの特殊性は一見して明らかであるが、その特殊性の抽出は調査者の問題意識によって異なる。われわれの関心は、すでにのべたように、ニュータウンにおける子どものパースナリティ形成、ならびにその基盤としての生活行動と文化受容ということにあり、したがって、本章におけるアプローチの角度は、その観点からするニュータウンの社会・文化的条件であることはもちろんである。

#### (1) 同質性・単一性

表1 職業構成 (単位%)

| 世帯主の職業    | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-----------|--------|------|------|
| 管 理 職     | 43.5   | 6.0  | 19.1 |
| 専 門 技 術 職 | 13.7   | 7.0  | 7.0  |
| 一 般 事 務 職 | 26.7   | 18.9 | 15.5 |
| 労 務 関 係   | 2.3    | 13.9 | 17.6 |
| 商・工 業 経 営 | 6.1    | 12.9 | 28.8 |
| 自 由 業     | 2.3    | 1.0  | 1.8  |
| 農・林 業     |        | 28.7 | 0.3  |
| 無 職       |        | 2.0  | 0.3  |
| そ の 他     | 3.8    | 7.0  | 4.2  |
| N. A.     | 1.6    | 2.6  | 5.4  |
| 調 査 人 口   | 131人   | 101人 | 330人 |

表2 勤め先の規模 (単位%)

| 勤め先の人数   | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|----------|--------|------|------|
| 9人以下     | 8.4    | 9.0  | 22.4 |
| 10～49    | 6.9    | 9.9  | 17.3 |
| 50～299   | 17.6   | 11.9 | 15.5 |
| 300～999  | 13.7   | 4.0  | 5.8  |
| 1,000人以上 | 42.7   | 16.9 | 16.7 |

団地の中に一步足をふみ入ると、4～5階建のコンクリートの長いアパートが、将棋倒しでもできそうなふうに並んでいる。夏の夕食など、その建物の1階から5階まで、同じように若い団地夫人たちが、ベランダ寄りの同じ所に、同じ方向にむかって立ち、マナ板をたたいている風景によくお目にかかる。ちょっと異様な感じである。それというのも、同じ構造の部屋の同じ場所に炊事場(団地ではキッチンという)があるからだ。

香里の場合、賃貸アパート約4,600戸の中、その84%は2K(2寝室とキッチン)または2DK(2寝室とダイニング・キッチン)である。しかも、団地



サイズという狭い間取りでは、変った家具の入れようもない。せいぜい、色を変えてささやかな個性を示すぐらいなのだ。外からみても、内には入っても、ほとんど同じような建築学的構造をもっているわけである。

そこに住む人びとは、どういう社会的特性をもっているのだろうか。以下、昭和40年度に小学校6年生であった子どもたちの父母調査（'65年12月～'66年1月）にもとづいて検討してみよう。

まず職業構成である。表1に示した通り、香里ではそのほとんど（84%）がサラリーマンだ。しかも、他の地域に比べると、管理職が圧倒的に多く、管理職と専門技術職で57%をしめている。表2の勤め先の規模と照らし合わせてみると、大企業の中堅ないし高級サラリーマン層の住む地域だといえることができる。

収入については、調査上の困難性もあり、適当な資料はないが、入居資格が家賃の6倍の月収という線におかれている点から考えて、低所得者はいない。そうかといって、（いわば）借家人か、分譲地に住める程度の人びとだから、とりたてていうほどの金持ちもない。似たりよったりの収入層が集まっていると考えてよいだろう。

ところで、香里の家族構成はどうなっているのだろうか。表3からわかるように、他の地域と比較して、祖父母

のいない家庭、つまり核家族が圧倒的に多い。大部分をしめるアパートの場合（カッコ内の数字）、とくにそうである。しかも、子ども数（表4）は比較的少なく、その65%は2人までにとどまっている。したがって、家族数（表5）も少なく、両親に子ども2人の家族というのが、ニュータウン社会の典型のように思われる。そして、父母たちの年齢は若いのだ。

以上のべてきたことから、香里ニュータウンでは、同じような核家族が、同じような住居で、同じ程度のサラリーマン家庭の生活をしているということになる。いま

表3 祖父母の有無 (単位%)

|      | ニュータウン      | 近郊農村 | 大阪市内 |
|------|-------------|------|------|
| 祖父母  | 0.8 (—)     | 14.9 | 7.9  |
| 祖父のみ | 2.3 (—)     | 4.0  | 3.0  |
| 祖母のみ | 4.6 (5.7)   | 23.8 | 14.8 |
| なし   | 92.4 (94.3) | 57.4 | 73.9 |

( ) 内は賃貸アパートの場合

表4 子ども数 (単位%)

| 人数  | ニュータウン      | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-----|-------------|------|------|
| 1人  | 13.0 (11.4) | 12.9 | 7.9  |
| 2人  | 51.9 (60.0) | 43.6 | 45.2 |
| 3人  | 29.0 (20.0) | 29.7 | 31.9 |
| 4人  | 6.1 (8.3)   | 11.1 | 10.6 |
| 5人  |             | 1.0  | 3.3  |
| 6人  |             | 1.0  | 2.1  |
| 平均数 | 2.3人        | 2.5人 | 2.6人 |

( ) 内は賃貸アパートの場合



表5 家族数

(単位%)

| 人 数 | ニュータウン      | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-----|-------------|------|------|
| 2人  |             |      | 1.5  |
| 3人  | 12.2 (11.4) | 7.2  | 6.4  |
| 4人  | 48.9 (54.3) | 25.7 | 33.9 |
| 5人  | 28.2 (22.9) | 29.7 | 27.0 |
| 6人  | 9.9 (11.4)  | 21.8 | 18.2 |
| 7人  | 0.8         | 9.0  | 7.0  |
| 8人  |             | 6.0  | 5.5  |
| 9人  |             | 1.0  | 0.3  |
| 10人 |             |      | 0.3  |
| 平均数 | 4.4人        | 5.2人 | 5.0人 |

( ) 内は賃貸アパートの場合

のニュータウンでは、居住者の生活は非常に同質的、単一的になっているのである。

このことは、地域社会の機能をもていえる。先にふれたように、公共施設、商業・サービス施設は人口に比して非常に少なく、バラエティに乏しい。伝統的な文化機関(寺社の類)もなければ、俗悪なものもない。産業や生産に従事する機関や商売もみられないという具合なのである。

ニュータウンという地域社会の、このような構造・機能性における同質的、単一的特性が、子どもたちの日常生活経験に少なからぬ影響をもっていることは想像に難くないであろう。

## (2) 閉鎖性

香里の場合、周囲が丘陵によってかこまれ、隣接地域と隔絶された状況にあることはすでにのべた。だが、その閉鎖性は、単に地理的条件だけにとどまらぬようだ。

というのも、最近の大団地やニュータウンは、都市郊外の農村地域に建設されるようになっており、そうなると、周辺地域との文化的落差は非常に大きなものとなる。表1に示した職業構成、表7の学歴構成だけから考えてもそのことはうなずかれよう。要するに、次項でのべるが、文化・教養度はやはり相当にひらきがあるのだ。

しかも、調査対象となった6年生の父兄についてみると、地元出身者は、近郊農村で55%、大阪市内は43%であるのに対し、香里では枚方市出身者は1人もいない。そのみか、大阪府以外の出身者が60%をしめるという状態で、いかに地元社会との

表6 世帯主の勤務地 (単位%)

| 勤 務 地        | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|--------------|--------|------|------|
| 大 阪 市        | 65.6   | 14.9 | 67.6 |
| 枚 方 市        | 3.8    | 39.6 |      |
| 北 河 内        | 5.3    | 5.0  |      |
| 京 都 市        | 9.9    | 1.0  | 1.2  |
| 上記以外の大 阪 府   | 7.6    | 3.0  | 7.3  |
| 上記以外の大 阪 府 近 | 2.3    | 1.0  | 1.8  |
| 上 記 以 遠      | 0.8    |      | 0.3  |

(注) 北河内一大東市、守口市、寝屋川市、門真市その他の北河内地区



つながりが希薄であるかがわらう。

その上、世帯主の勤務地を検討してみると、表6にみられる通り、大部分は大阪市であり、京都市や京阪電鉄沿線地の勤務地がそれにつづいている。地元枚方市への勤務者はわずか4%にしかすぎない。

以上のような、地理的、文化的、生活的条件がからみ合って、ニュータウンと周辺地域とのコミュニケーションは生まれず、閉鎖的傾向を強くもつようになるのである。

表7 父母の学歴

(単位%)

| 学 歴      | 父 親        |      |      | 母 親        |      |      |
|----------|------------|------|------|------------|------|------|
|          | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 小学・高小・新中 | 4.6        | 58.4 | 33.0 | 8.4        | 46.5 | 31.5 |
| 旧中・高女・新高 | 33.6       | 17.9 | 39.4 | 75.6       | 40.6 | 60.9 |
| 専門学校・短大  | 29.8       | 7.0  | 12.4 | 15.3       | 6.0  | 6.4  |
| 大学・大学院   | 29.8       | 5.0  | 8.5  | 0.8        |      | 0.3  |
| N. A.    | 2.2        | 11.7 | 6.7  | 0          | 6.9  | 0.9  |

### (3) 高い文化・教養度

職業構成からみても、香里では、管理職ならびに専門技術職のサラリーマン家庭が多く、家庭の文化度の高さが予想された。そこで、父母の学歴を調べてみると表7のようになり、専門学校と大学の卒業者を合わせて、父親60%、母親16%で、他の地域に比して圧倒的に学歴の高いことがわかる。とくに、父親の大学以上の卒業者の比率の高いのが目立っている。学歴の高さが、直ちに文化・教養度の高さを意味するわけではないが、

表8 家庭にある書物

(単位%)

| 書 物 の 種 類     | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|---------------|------------|------|------|
| 子ども用百科事典      | 58.7       | 45.0 | 48.3 |
| 家庭医学事典        | 39.9       | 24.8 | 31.8 |
| 独語または仏語辞書     | 18.6       | 4.3  | 6.9  |
| 文学(小説)全集      | 47.5       | 18.4 | 28.8 |
| 専門の仕事や学問上の講座  | 34.0       | 15.2 | 22.9 |
| 今年10月以降の列車時刻表 | 27.3       | 16.6 | 20.1 |
| 詩 集           | 22.8       | 13.2 | 21.2 |

(注) 文学全集は半分以上そろっているものとする。

表9 購読誌

(単位%)

| 種 類 | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-----|------------|------|------|
| 週刊誌 | 28.4       | 17.1 | 21.4 |
| 月刊誌 | 45.5       | 30.5 | 37.0 |



表10 母親のよくみているテレビ番組(単位%)

| 番組名     |             | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|---------|-------------|--------|------|------|
| 一般教養    | 生活の知恵       | 16.5   | 8.6  | 7.2  |
|         | 野生の王国       | 7.3    | 4.1  | 6.0  |
|         | 新日本紀行       | 5.3    | 2.3  | 4.1  |
|         | ディズニールランド   | 4.0    | 2.3  | 7.3  |
|         | 平均          | 8.3    | 4.3  | 6.2  |
| 婦人向け教養  | 女性専科        | 8.1    | 1.2  | 7.4  |
|         | 婦人百科        | 6.0    | 2.3  | 4.2  |
|         | 暮しの窓        | 5.4    | 1.2  | 4.1  |
|         | ひととき        |        |      | 0.5  |
|         | 平均          | 4.9    | 1.2  | 4.1  |
| 一般ドラマ   | 太閤記         | 37.4   | 16.8 | 24.5 |
|         | 事件記者        | 17.9   | 6.8  | 13.5 |
|         | 三匹の侍        | 5.4    | 3.0  | 4.1  |
|         | 続隠密剣士       | 1.3    | 4.1  | 2.3  |
|         | 平均          | 15.5   | 7.7  | 11.1 |
| 婦人向けドラマ | 絶唱          | 7.4    | 2.1  | 9.2  |
|         | 海は満つることなし   | 2.7    | 2.3  | 3.8  |
|         | 命なりけり       | 2.7    |      | 2.8  |
|         | 芸者っ子        |        | 4.3  | 3.3  |
|         | 平均          | 3.2    | 2.2  | 4.8  |
| 歌謡      | 歌のグラランドショー  | 9.3    | 5.0  | 6.9  |
|         | コロムビアヒットショー | 1.4    | 1.8  | 1.5  |
|         | 歌謡曲ベストテン    | 0.7    | 2.8  | 3.8  |
|         | ものまね歌合戦     |        | 5.9  | 3.1  |
|         | 平均          | 2.9    | 3.9  | 3.8  |
| お笑い     | てなもんや三度笠    | 10.5   | 14.1 | 13.2 |
|         | お笑い三人組      | 2.0    | 0.9  | 2.6  |
|         | 笑えば天国       | 0.7    |      | 1.8  |
|         | ちびっこギャング    |        | 4.3  | 0.6  |
|         | 平均          | 3.3    | 4.8  | 4.6  |

ひとつの指標ではあろう。

さらに、家庭の文化度を  
知るために、家庭に備えら  
れている教養書と購読誌  
(週刊・月刊)を調べてみ  
たのが、表8と表9である。  
教養書は、どれにおいても  
香里の家庭は高い所有率を  
示しており、また、購読し  
ている週刊誌、月刊誌も多  
い。文字文化に対する親近  
度の強さを示すものであろ  
う。

ところで一方、映像文化  
に対する接触度はどうであ  
ろうか。テレビ番組名をあ  
げて、母親に自分自身よく  
みている番組をチェックし  
てもらった結果を系列別に  
示したのが、表10である。  
これをみると、教養番組と  
一般ドラマでは香里の母親  
たちの視聴率が高い傾向が  
あるが、婦人向けドラマで  
は大阪市内の母親、歌謡番  
組とお笑い番組になると、  
逆に近郊農村の母親の方が  
高い視聴傾向を示している。  
これくらいの視聴率では有  
為の差を云々することはで  
きないけれども、傾向とし  
ては、香里の母親たちのテ  
レビ文化に対する接触習慣



の教養性を示している。そういった母親の態度は、ひるがえって、家庭の文化的、教養的雰囲気であらわしているとみてよいであろう。

#### (4) 近代的合理性

学歴や教養の高さの上に、家屋の構造や地域社会の条件などもからみ合って、ニュータウンでは、近代的、合理的生活様式がとられる傾向が強いようである。例えば、表11は、主婦の日常の家事労働がどの程度機械化され、合理化されているかを示したものである。電気(ガス)洗濯機、電気(ガス)冷蔵庫、電気(ガス)炊飯器などは、周辺農村においてもこの頃ではかなり普及してきているが、その他のものではやはり大きなひらきがみられる。新しいものにな

るほど普及率の差は大きいようである。香里の場合、料理ばかり(キッチン・スケール)がよく用いられているのは、主婦の合理的な生活態度のひとつの象徴であろう。表12の、家計簿をつけているかどうかに関する調査を考え合わせてみてもそれはいえる。

家事を合理化してできた余暇時間はどう使われているのであろうか。今のところ詳しい資料はないが、われわれの知り得た範囲では、主婦自身のために利用される傾向が強いようだ。例えば、夕食後、主婦が何をしているかを調べたところでは、テレビをみたり新聞を読んだりする点では他の地域の主婦とは変りはないが、家事以外の仕事、他家の訪問、子どもの勉強をみるということは少ない。逆に、多いのは、家事・育児、趣味、読書などである。年令の若いだけに、育児の仕事があるのは当然だが、趣味や読書をするという主婦が多いのは、合理的な生活を送り、自分自身の生活をもとうとしていることではなかろうか。

表11 家事の合理化の程度 (単位%)

|                | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|----------------|--------|------|------|
| 電気洗濯機          | 97.7   | 89.1 | 91.8 |
| 電気(ガス)冷蔵庫      | 97.7   | 84.2 | 87.3 |
| 電気(ガス)炊飯器      | 94.7   | 73.3 | 85.8 |
| 電気掃除機          | 90.1   | 42.6 | 76.1 |
| ミキサーまたはジューサー   | 60.3   | 32.7 | 50.3 |
| 電気(ガス)オーブン     | 53.4   | 9.9  | 32.1 |
| 熱蔵庫            |        | 2.0  | 1.2  |
| 計量米びつ          | 3.8    | 10.9 | 10.9 |
| 瞬間湯かし器         | 51.9   | 9.9  | 47.6 |
| ロースター又はホットプレート | 39.7   | 20.8 | 26.7 |
| 料理ばかり          | 55.0   | 11.9 | 23.0 |

表12 家計簿をつけるか (単位%)

|         | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|---------|--------|------|------|
| 毎月つけている | 51.1   | 31.7 | 42.1 |
| ときどきつける | 22.1   | 23.8 | 26.4 |
| つけていない  | 25.2   | 39.6 | 28.8 |



表13 新しい家庭行事

(単位%)

| 家 庭 行 事   | ニ<br>ュ<br>ー<br>タ<br>ウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-----------|------------------------|------|------|
| 母 の 日     | 67.7                   | 58.1 | 60.0 |
| 父 の 日     | 52.9                   | 28.8 | 38.0 |
| 主人の誕生日    | 82.6                   | 52.1 | 55.3 |
| 主婦の誕生日    | 70.0                   | 41.8 | 56.0 |
| 子どもの誕生日   | 98.5                   | 80.1 | 78.7 |
| 結 婚 記 念 日 | 41.8                   | 10.9 | 21.6 |
| 家 族 旅 行   | 43.7                   | 25.5 | 27.1 |

表13は、1年間の家庭行事、

年中行事の調査から、新しい家庭行事を抜き出して示したものである。四季を通じての伝統的な家庭行事、地域の行事に関しては、ニュータウンは非常に少ないけれども、こういった新しい家庭的な行事となると圧倒的に多くなる。父親の誕生日、結

婚記念日、家族旅行などでとくに差がみられるのは、家庭生活のあり方や家庭文化という点で、一般の家庭とはやはり相当異なっていることを示すものではないか。ニュータウンにおけるこのような年中行事をみていると、むしろ反伝統主義といったものをさえ感じさせられるのである。

それというのも、ニュータウンの社会的状況を考えてみれば当然のことではある。公共的施設にしろ、文化機関にしろ、生活上不可欠のもの以外はまったく存在しないのだ。神社や寺院をはじめ、伝統文化を支えているような機関も文化財も場所もない。もちろん、文化伝統や慣習も存在しない。

地域住民による集団組織にしても、ニュータウンでは、自治会を頂点とした自発的な趣味的集団やサークル活動という形をとる。それらの組織目的や内容は、主として趣味、娯楽、家政、育児、学習といったもので、所属性もきわめてボランティアなものなのである。このような地域文化の中には入りこめるのは、せいぜい、ショーウ化された盆踊りくらいのもので、それ以外のものはない。

また、ニュータウンにおいては、映画館、飲み屋、パチンコ屋、広告類……のような、いわゆる俗悪なもの、その他の醜悪なものは一切シャットアウト。公害や騒音からも解放されており、交通地獄もない。そして清潔である。ニュータウン当局の管理の目は、すみずみまでゆきとどいているというわけだ。

このように、ニュータウンでは、地域社会の形態からみても、家庭の生活様式や意識からみても、相当に近代合理主義の様相をおびているといえよう。そして、それは、ある場合には伝統的文化との断絶、反伝統主義の傾向をさえもってくるようである。

##### (5) 弱い統合性・凝集性

香里ニュータウンが、地形的に隣接の地域と隔絶された状況にあり、閉鎖性をもっていること、しかし、内部の住民の文化・教養度は高く、生活様式は合理的で



あることをのべた。では、香里に住む人びとは、自分の地域社会に対してどういう結びつき方をしているのだろうか。

調査対象となった6年生の父母で、地元出身者は1人もいないことは先にふれた。つまり、ニュータウンの住人はほとんどよそ者なのである。そして、その人たちの香里ニュータウンでの居住歴は浅い。せいぜい7～8年である。周辺農村では、親の代、祖父の代から住みついているという家庭がかなり多いのとはまったく対象的である。

いま、小学校区（ニュータウンの場合はニュータウン内）にある親戚数、ならびに親戚同様の深いつき合いをしている家の数を3つの地域で比較してみると、表14、表15のようになる。地元出身者がいないのであるから、そこに血縁者がほとんどいないのは当然といえば当然だが、地域社会での血縁関係は非常に少なく、それに準ずるような関係も薄い。つまり、地縁的、血縁的關係からする地域社会への結びつきは非常に希薄なのである。しかも、地元へ勤務して糊口の資を得たり、地元で商売をやって利益を得ているというケースも極めて稀だとすると、地元社会との利害関係は少なく、したがって、親近感も当然薄くならざるを得ないだろう。

そういうニュータウンの人びとは、どの程度の定着性（永住意識）をもっているのだろうか。ニュータウン

全体としても、他の地域より永住意識は少なく、一定の期間がすぎれば他の地に移住しようと考えているものが多い。ニュータウンの中でも、とくに賃貸アパートに住む人びとのみを抽出して調べてみると（カッコ内の数字）、その定着性は大幅に減少する。大企業のサラリーマンが多いとすれば、転勤ということも予想しなければならないだろうし、第一、現在のアパートの狭さでは、いつまでも住んでいるというわけにはいかないのである。

以上のようなわけで、ニュー

表14 校区内の親せき数 (単位%)

| 軒 | 数     | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|---|-------|------------|------|------|
| な | し     | 86.3       | 25.7 | 60.6 |
| 1 | 軒     | 12.2       | 9.9  | 21.5 |
| 2 | 軒     | 0.8        | 8.0  | 8.8  |
| 3 | ～ 4 軒 |            | 11.9 | 3.3  |
| 5 | 軒 以上  |            | 40.6 | 3.0  |

(注) ニュータウンの場合はニュータウン内

表15 校区内の親せき同様のつき合い数 (単位%)

| 軒 | 数     | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|---|-------|------------|------|------|
| な | し     | 62.6       | 31.7 | 47.3 |
| 1 | 軒     | 15.3       | 8.0  | 20.0 |
| 2 | 軒     | 10.7       | 11.9 | 13.3 |
| 3 | ～ 4 軒 | 6.1        | 11.9 | 10.6 |
| 5 | 軒 以上  | 5.3        | 26.7 | 4.5  |

(注) ニュータウンの場合はニュータウン内



表16 定 着 性

(単位%)

|                               |          | ニュータウン      | 近郊農村 | 大阪市内 |
|-------------------------------|----------|-------------|------|------|
| な他<br>るへ<br>べ移<br>りた<br>くい    | 移れそうである  | 7.6 (5.7)   |      | 6.7  |
|                               | 移れそうにない  | 8.4 (8.6)   | 6.0  | 9.7  |
|                               | 合 計      | 16.0 (14.3) | 6.0  | 16.4 |
| 一めり<br>定ばた<br>期他い<br>間へ<br>住移 | 見 こ み あり | 26.7 (42.9) | 3.0  | 15.8 |
|                               | 見 こ み なし | 12.2 (11.4) | 5.0  | 8.5  |
|                               | 合 計      | 38.9 (54.3) | 8.0  | 24.3 |
| 永 住 し た い                     |          | 41.2 (25.7) | 70.0 | 47.6 |

( ) 内は賃貸アパートの場合

タウンでは自分の  
住んでいる地域へ  
の結びつきが薄く、  
したがって、居住  
者の集団組織が同  
じ土地に住んでい  
るからという理由  
でつくられること  
はまずない。つま  
り、町内会的組織  
はできあがらない  
のである。団地や

ニュータウンでは、自治会という名の組織がよく結成されるが、それも共通の利害を中心としているのであり、その目的（学校、幼稚園、保育所などの建設やマーケットや交通の問題）が一応達成されると、住民の関心は薄らいでいく。そして、各家庭では、自己のプライバシーの中に閉じこもろうとする傾向を強めるのである。

要するに、ニュータウンというところは、周辺の地域とは隔絶され、閉鎖的でありながら、内部の統合性、凝集性はきわめて弱い社会だといえよう。

#### (6) 消費・休養型

団地やニュータウンが、別名ベッド・タウンとか住宅都市とか呼ばれるように、男性にとっては、そこは、家庭をおいておき、子を育て、寝に帰る場所であるようだ。男たちは、遠くの大都市まで朝早く働らきに出払ってしまうので、人口数万を数えるこの住宅都市は、昼間は女と子どもだけの社会となる。女と子どもの都市——考えてみれば類のない異様な社会ではある。要するに、ニュータウンとは、経済学の概念からすれば消費オンリーの社会なのだ。

ニュータウン内の商売や店舗を一べつして気がつくことは、生産に従事しているものがまったくないことだ。ないのは当局が許可しないからである。あるいは、生活必需品と最低限度のオシャレ用品を扱う程度の店舗にしかすぎない。香里の場合でも、住宅約6,500戸に対する48戸（マーケットを除いて）の商店は、大略、飲食、下着用品、理容、医薬品に限られ、おどろくべきバラエティの乏しさである。つまりニュータウンとは、消費・休養型としかいいようのない社会なのである。



以上、われわれの問題意識の角度から、ニュータウン社会における同質的一閉鎖的—高い文化・教養度—近代的合理性—統合性の弱さ—消費・休養型という性格を指摘してきた。たしかに現在のままでいくと、ニュータウンは文化的に高度で、合理的で、清潔ではありうるが、非常にかたよりのある、幅のせまい、閉鎖的なコミュニティになる可能性が強い。

他の一般の地域社会では、文化・教養的には低く、不潔で、俗悪ではあるが、非常に解放的で、さまざまな要素を包みこんでおり、幅の広い生活経験が可能なのである。

金持もあれば貧乏人もいる。高級なものもあれば低俗なものもある。さまざまな職業や商売、いろいろな種類の人間、危険もあり不潔でもあるがスリルと変化に富んだあそび場所……。子どもたちは、日常生活の中でさまざまなものと向き合い、直接体験しながら成長していくのである。幅の広い、多種多様な生活経験、従来の社会ではそれが常態であったためにあらためてふり返られはしなかったが、人間の思想と創造性を培っていく上で、実は重要な役割を果たしてきたのではあるまいか。

一方ニュータウンの場合、その社会・文化的条件から考えて、子どもたちの直接的な生活経験が、同じようなレベルの同じような様式の中に限定され、幅のせまいかたよったものになる危険性はないだろうか。団地の規模が大きくなり、ニュータウンと呼ばれるものになればなるほど、子どもたちの生活は其中で完結し、日常的な経験の範囲では、その外へ出る可能性はなくなるのである。そういった状況が、子どもたちのパースナリティ形成に及ぼす影響は決して軽くはないと思われるのだ。

#### 4 子どもたちの文化受容と生活経験

前章で考察したように、子どもたちの生活経験の場としてのニュータウンは、かなり特殊な社会的、文化的条件をもっていることがわかった。では、そのニュータウンの中で、子どもたちは日頃どのような生活をし、どのような形で文化を受容しているのだろうか。3地域における比較調査をもとにして、この問題を考えてみたい。なお、この章で引用される調査資料は、'64年11月中旬、小学校5年生（前章の調査対象となった家庭の子どもたち）に対しておこなったものである。

##### (1) 文化受容（マス・メディア接触）について

一口に文化受容といってもその幅は広いが、ここでは、マス・メディア接触の



観点から考察をすすめていきたい。それによって、ニュータウンの子どもたちの文化受容の状況と傾向について、大体的見当をつけることはできよう。

現代の子どものマス・メディア接触といえば、まずテレビが思いあたる。テレビ視聴は、子どもの生活の中に確固とした位置をしめてきたことはたしかだ。NHKによる「日本人の生活時間調査」( '59年～ '62年)も、「ラジオ・テレビ視聴」が「勉強」「あそび」とならんで、生活の第3の位相として出現してきたことを示している。

まずはじめに、香里の子どもたちは、どれくらいの時間テレビ視聴をしているのか、それからみていこう。表17は、男女別に、3地域の子どもの1日のテレビ視聴時間を比較したものである。これをみると、香里では男女とも、他の地域に比して視聴時間が少なく、平均2時間半弱である。とくに、4時間以上もみるという過度視聴者は非常に少ない。一方、近郊農村の男子の視聴時間の長いのが目立っている。

これをみると、3地域とも視聴時間が少し長すぎるようだ。30分ごとに区切った時間スケールの上に主観点判断を求めたという調査方法にひとつの問題があると思うが、ここでのねらいは比較検討ということなので、そのことは一応おいておきたい。

ともかく、香里の子どもたちのテレビ視聴時間は、他の地域の子どもたちに比

表17 平日のテレビ視聴時間 (単位%)

| 視 聴 時 間   | 男 子                    |      |      | 女 子                    |      |      |
|-----------|------------------------|------|------|------------------------|------|------|
|           | ニ<br>ュ<br>ー<br>タ<br>ウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニ<br>ュ<br>ー<br>タ<br>ウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| ほとんど見ない   | 2.4                    |      | 5.8  | 1.2                    | 1.5  | 3.9  |
| 約 30 分    | 9.4                    | 5.3  | 1.2  | 6.0                    | 1.5  |      |
| 約 1 時 間   | 5.9                    | 1.3  | 5.8  | 8.4                    | 1.5  | 7.9  |
| 約 1 時 間 半 | 11.8                   | 5.3  | 3.5  | 16.9                   | 13.2 | 6.6  |
| 約 2 時 間   | 12.9                   | 6.6  | 8.1  | 20.5                   | 4.4  | 9.2  |
| 約 2 時 間 半 | 14.1                   | 5.3  | 11.6 | 8.4                    | 17.6 | 11.8 |
| 約 3 時 間   | 10.6                   | 18.4 | 17.4 | 14.5                   | 23.5 | 18.4 |
| 約 3 時 間 半 | 20.0                   | 27.6 | 19.8 | 16.9                   | 26.5 | 22.4 |
| 4 時 間 以 上 | 11.8                   | 30.3 | 24.4 | 6.0                    | 10.3 | 21.1 |
| 平 均       | 145分                   | 187分 | 170分 | 145分                   | 168分 | 168分 |
| 調 査 人 口   | 85人                    | 76人  | 86人  | 83人                    | 68人  | 76人  |

(注) 調査時期は11月中旬



ニュータウンにおける子どもの生活と文化(1)

較するとかなり少なく、適切な配慮が払われているといえよう。

では、視聴している番組内容については、どういう傾向がみられるだろうか。子どもたちに人気のある番組を提示してよくみているものにチェックさせ、その結果を系列別に示したのが表18である。どの地域の子どもたちも、アクション、お笑い、マンガ、などを好んで視聴しているが、系列ごとに比較してみると、香里の子どもたちは、教養番組を相対的によくみているようだ。「生活の知恵」「新日本紀行」などの視聴率は5年生にしてはかなり高い。一方、教養番組以外

表18 よくみているテレビ番組

(単位%)

| 番組名       |             | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|-----------|-------------|--------|------|------|--------|------|------|
|           |             | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 教 養       | 生活の知恵       | 14.1   | 2.6  | 10.5 | 16.9   | 5.9  | 5.3  |
|           | 新日本紀行       | 25.9   | 3.9  | 18.6 | 15.7   | 7.4  | 9.2  |
|           | ディズニーランド    | 58.5   | 57.9 | 64.0 | 51.8   | 26.5 | 52.6 |
|           | 平 均         | 32.8   | 21.5 | 31.0 | 28.1   | 13.3 | 22.4 |
| ア ク シ ョ ン | 隠密剣士        | 48.2   | 68.4 | 54.7 | 32.5   | 54.4 | 40.8 |
|           | 三匹の侍        | 42.3   | 60.5 | 51.2 | 37.3   | 35.3 | 34.2 |
|           | 事件記者        | 23.5   | 23.7 | 36.0 | 30.1   | 30.9 | 28.9 |
|           | 平 均         | 38.0   | 50.9 | 47.3 | 33.3   | 40.2 | 34.6 |
| 歌 謡       | 明色ものまね歌合戦   | 5.9    | 13.2 | 14.0 | 6.0    | 29.4 | 15.8 |
|           | コロンビアヒットショー | 7.1    | 23.7 | 23.3 | 14.5   | 42.6 | 25.0 |
|           | 歌のグランドショー   | 21.1   | 19.7 | 34.9 | 33.7   | 45.6 | 46.1 |
|           | 平 均         | 11.4   | 18.9 | 24.1 | 18.1   | 39.2 | 29.0 |
| お 笑 い     | お笑い三人組      | 30.6   | 21.1 | 31.4 | 28.9   | 41.2 | 38.2 |
|           | ちびっこギャング    | 43.5   | 59.2 | 55.8 | 36.1   | 33.8 | 44.7 |
|           | てなもんや三度笠    | 71.8   | 76.3 | 68.6 | 51.8   | 72.1 | 72.4 |
|           | 平 均         | 48.6   | 52.2 | 51.9 | 38.9   | 49.0 | 51.8 |
| マ ン ガ     | エイトマン       | 82.4   | 86.8 | 82.5 | 54.2   | 63.2 | 56.6 |
|           | 鉄腕アトム       | 80.0   | 89.5 | 68.6 | 66.3   | 64.7 | 55.3 |
|           | ポパイ         | 23.5   | 43.4 | 38.4 | 14.5   | 30.9 | 32.9 |
|           | 平 均         | 62.0   | 73.2 | 63.2 | 45.0   | 52.9 | 48.3 |



のものとなると、大阪市や近郊農村に比して低くなり、とくに「コロンビアヒットショウ」「ちびっこギャング」「ポパイ」などは大きく下まわっている。これらの番組が、おもしろいけれども泥くさく、スマートさがないことを考えると、ニュータウンの子どもたちの嗜好の傾向が推察できる。

ここにはだしていないが、当時放送されていた「赤穂浪士」のような内容の高いドラマの視聴率が高いことなども考えてみると、香里の子どもたちの知的な高さ、教養性がうかがい知れる。そしてそれは、表10に示したように、母親のテレビ嗜好の文化・教養度の高さと照らし合わせてみてもうなづけることがらである。

次に、印刷メディアについての考察にすすもう。表19は、5冊の少年少女向けの週刊誌の購読率を調査したものである。あまり違いはみられないようだが、これらの週刊誌の性格とからみ合わせてみると、香里の子どもは、大阪市や近郊農村の子どもとは、少し違った傾向をもっている。男子の場合、香里では「少年マガジン」が多いのに対し、近郊農村ではどれも大体同じような購読率であり、大阪市内は「少年サンデー」が多い。これら3誌の内容分析をしてみると、同じようなものではあるが、どちらかといえば「少年マガジン」は読物が多く、マンガが少ない。「少年キング」は、逆にマンガが多く読物が少ないのである。「少年サンデー」はその中間性格をもっているといえよう。

少女向けの週刊誌「少女フレンド」と「マーガレット」の間にも、いささかの違いがあるようだ。香里と大阪市の子どもたちがより好んでいる「マーガレット」は、読み物は少ないけれども、オシャレや趣味に関する記事や読者間のコミュニケーションの場がやや多く提供されている。きれいなグラビヤが多く、シャレていて都会的センスがあるのだ。週刊誌のえらび方にも、ニュータウンの子どもたちの読物嗜好やスマートさが感じられる。

表20は、子どもたちが目を通してしている週刊誌（1週の間）、月刊誌（1ヶ月の

表19 購読週刊誌

(単位%)

| 雑誌名     | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|---------|--------|------|------|--------|------|------|
|         | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 少年 マガジン | 56.5   | 44.7 | 57.0 | 16.9   | 10.3 | 17.1 |
| 少年 サンデー | 50.6   | 42.1 | 67.4 | 13.3   | 5.9  | 22.4 |
| 少年 キング  | 36.5   | 43.4 | 31.4 | 13.3   | 4.4  | 10.5 |
| 少女 フレンド | 5.9    | 3.9  | 3.5  | 27.7   | 32.4 | 30.3 |
| マーガレット  | 4.7    | 6.6  | 7.0  | 41.0   | 33.8 | 48.7 |



表20 よんでいる週刊誌・月刊誌数

(単位%)

| 冊数  |           | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|-----|-----------|--------|------|------|--------|------|------|
|     |           | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 週刊誌 | めったに見ない   | 16.5   | 34.2 | 24.4 | 32.5   | 35.3 | 18.4 |
|     | 1 ~ 2 冊   | 55.3   | 42.1 | 50.0 | 49.4   | 53.0 | 57.9 |
|     | 3 ~ 4 冊   | 25.9   | 18.4 | 18.7 | 14.4   | 5.8  | 19.7 |
|     | 5 冊 ぐ ら い | 3.5    | 2.6  | 5.8  | 2.4    | 2.9  | 2.6  |
| 月刊誌 | めったに見ない   | 22.4   | 38.2 | 30.2 | 26.5   | 36.8 | 18.4 |
|     | 1 ~ 2 冊   | 48.2   | 42.1 | 44.2 | 49.4   | 45.6 | 56.6 |
|     | 3 ~ 4 冊   | 15.3   | 17.1 | 18.6 | 15.7   | 11.8 | 15.8 |
|     | 5 ~ 6 冊   | 2.4    | 1.3  | 2.3  | 6.0    | 2.9  | 3.9  |
|     | 7 冊 以 上   | 2.4    | 2.6  | 5.8  | 1.2    | 1.5  | 3.9  |

間)の冊数を調べたものである。もちろん、子ども向けのものが主体だが、それ以外のものもふくまれている。冊数においては、3地域の間でいうべきほどの差はないが、「めったに見ない」子どもの比率をみると、男女とも差がはっきりあらわれている。ニュータウンの子どもたちは、他の地域に比して、雑誌メディアに接触する機会が多いことを物語っている。

表21 一週間に読むマンガ本冊数

(単位%)

| 冊数       |         | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|----------|---------|--------|------|------|--------|------|------|
|          |         | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| めったに読まない | 1 ~ 2 冊 | 15.3   | 14.5 | 12.8 | 30.1   | 14.7 | 17.1 |
|          | 3 ~ 4 冊 | 47.1   | 34.2 | 41.9 | 51.8   | 47.1 | 53.9 |
|          | 5 冊 以 上 | 27.1   | 26.3 | 24.4 | 10.8   | 25.0 | 21.1 |
|          |         | 13.0   | 23.7 | 19.7 | 7.2    | 11.8 | 7.9  |

表22 一ヶ月に読む本(小説・伝記・童話)冊数

(単位%)

| 冊数       |           | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|----------|-----------|--------|------|------|--------|------|------|
|          |           | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| めったに読まない | 1 冊 ぐ ら い | 17.6   | 28.9 | 16.3 | 14.5   | 13.2 | 9.2  |
|          | 2 冊 ぐ ら い | 29.4   | 36.8 | 31.4 | 21.7   | 36.8 | 38.2 |
|          | 3 ~ 4 冊   | 25.9   | 15.8 | 20.9 | 30.1   | 25.0 | 26.3 |
|          | 5 冊 以 上   | 14.1   | 2.6  | 20.9 | 18.1   | 10.3 | 17.1 |
|          |           | 11.8   | 13.1 | 11.6 | 15.6   | 13.3 | 9.2  |



さて、子どもたちは、マンガ本や普通の読み物の本はどれくらい読んでいるのであろうか。表21は、1週間に読むマンガ本の数、表22は、1ヶ月間に読む本（小説、伝記、童話）の冊数を示したものである。香里の子どもたちは、マンガ本を読むことは比較的少ないが、読み物への接触は、他の地域の子どもたちより逆に多くなってくる。テレビ番組視聴の際にみられた選択傾向（態度）は、印刷メディアに対する場合にも同じようにあらわれてくるのである。

以上、映像文化（テレビ）ならびに印刷文化に対する接触状況と受容形態について眺めてきたわけである。結論としていえることは、3地域の子どもたちのマスコミ受容量にはとりたてていうほどの違いはないが、その受容形態にはかなりの相違がみられるということだ。つまり、ニュータウンの子どもたちのそれは、より知的であり、教育教養的なのである。それは、3章でふれたように、両親の学歴・教養は高く、家庭の雰囲気も地域社会全体の状況も文化的であることに大きな原因のひとつがある。

そして、ニュータウンの親たちは、うるさく勉強を強制したり、こごとを言ったりという様子はみえないが、やはり広い立場から教育に熱心であり、適切な配慮がなされているのであろう。子どもの生活のしかたに対するコントロール（しつけ）がゆきとどいており、子どもたちが、いわゆるよい子的な生活習慣を身につけているといえよう。

## (2) 生活経験について

ニュータウンの子どもたちは、他地域の子どもたちに比較して、毎日の生活をどのような仕方ですべて送っているであろうか。日常生活習慣的な行動と、あそび文化の両面について、生活経験という観点から検討してみよう。

### 日常生活行動

子どもたちの1日の生活の中で、睡眠、勉強、テレビ視聴、あそびは4つの大きな生活位相である。それらについての詳細なデーターを提示するスペースはないが、とりあえず、平均時間の比較のみを示しておこう。表23である。香里の子

表23 平均生活時間

| 平均時間    | 男 子    |        |        | 女 子    |        |        |
|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
|         | ニュータウン | 近郊農村   | 大阪市内   | ニュータウン | 近郊農村   | 大阪市内   |
| 睡眠時間    | 9時間25分 | 9時間42分 | 9時間19分 | 9時間25分 | 9時間41分 | 9時間21分 |
| 勉強時間    | 2時間    | 1時間40分 | 1時間52分 | 2時間8分  | 1時間59分 | 2時間13分 |
| テレビ視聴時間 | 2時間25分 | 3時間7分  | 2時間50分 | 2時間25分 | 2時間48分 | 2時間48分 |



どもたちの睡眠時間は、農村の子どもたちほどとはいえないが、大阪市内の子どもたちより多い。5年生としてはまず適当なところであろう。テレビ視聴時間は、教育的配慮によって適度に抑えられる一方、勉強時間は多くとっている。

かといって、香里の場合、週刊誌レベルで問題にされるような、教育ママによる勉強のおしつけや塾通い、おけいこごと競争といった傾向もみられないのである。表24は、塾ならびに家庭教師についている率を比較したもののだが、まったく差はみられない（もっとも、ニュートンではそれらの機会が得られ難いという事情もあるようだ）。いくぶん、ピアノやバイオリンのおけいこに通う子どもの比率が高いが、それとても数名のことで、問題となるほどのものではない。

あそびについては、次の項でくわしくのべるが、その形態や場所についての差はあっても、時間的な差はあまりないとわれわれはみている。

朝おきてから夜ねるまでの生活行動をとってみても、香里の子どもたちがもっともけじめがあり、放任や甘やかしも少なく、教育的立場からする習慣づけがなされているという様子がうかがえる。表25は「おこずかい」の使途と、その中から貯金するかどうかを調べたもののだが、ここからもその片りんがうかがえるであろう。近郊農村や大阪市内の子どもにとっては「おこずかい」は、まずお菓子を買うものとしての意味をもっており、はやりのあそび道具（プラモデル）やマンガを買う率も高い。

ところが香里の子どもたちはお菓子を買うことが非常に少なく、学用品、本、雑誌、趣味的なものの購入にむけられることが多い。しかも「おこずかい」の額は、3地域を比較して香里の子どもが一番少ない（男子平均400円、女子平均381円）傾向さえみられる。その上、香里では、その「おこずかい」の中から貯金をする子が多いのである。そのひとつの原因は、香里では「おこずかい」を月ぎめで与える家庭が多い（男子の場合、ニュートン61%、近郊農村25%、大阪市内49%）ことにもあるだろうが、やはり、家庭の雰囲気や生活習慣づけが大きく作用

表24 塾・家庭教師

(単位%)

|               | 男 子   |      |      | 女 子   |      |      |
|---------------|-------|------|------|-------|------|------|
|               | ニュートン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュートン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 塾へ行っている       | 22.5  | 22.8 | 22.6 | 17.5  | 16.1 | 17.3 |
| 家庭教師の家へ行っている  | 1.3   | 6.9  | 0.9  | 2.5   | 3.4  | 3.1  |
| 家庭教師に来てもらっている | 2.5   |      | 1.7  | 1.3   | 1.1  | 3.1  |



表25 おこずかいの使途

(単位%)

| 使 途                        |           | 男 子                        |      |      | 女 子                        |      |      |
|----------------------------|-----------|----------------------------|------|------|----------------------------|------|------|
|                            |           | ニ<br>ュ<br>ー<br>タ<br>ウ<br>ン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニ<br>ュ<br>ー<br>タ<br>ウ<br>ン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 買<br>う<br>品<br>物           | お 菓 子     | 21.3                       | 58.8 | 62.2 | 19.5                       | 70.5 | 75.8 |
|                            | 学 用 品     | 38.8                       | 31.8 | 34.2 | 60.9                       | 48.7 | 40.0 |
|                            | 本・雑誌      | 37.5                       | 20.0 | 19.8 | 31.7                       | 23.1 | 26.3 |
|                            | マ ン ガ     | 25.0                       | 29.4 | 29.7 | 14.6                       | 14.1 | 11.6 |
|                            | プ ラ モ デ ル | 46.3                       | 55.3 | 38.7 | 3.7                        |      |      |
|                            | 切 手       | 35.0                       | 29.4 | 28.8 | 21.9                       | 8.0  | 11.6 |
| 貯<br>金<br>を<br>す<br>る<br>か | 手 芸 材 料   | 10.5                       | 5.7  | 1.8  | 14.6                       | 2.6  | 10.5 |
|                            | 大 体 す る   | 37.5                       | 21.2 | 31.5 | 46.3                       | 26.9 | 38.9 |
|                            | 時 ど き す る | 25.0                       | 34.1 | 38.7 | 25.6                       | 28.2 | 31.6 |
|                            | た ま に す る | 20.0                       | 15.3 | 14.4 | 15.9                       | 23.1 | 14.7 |
|                            | ほとんどうしない  | 15.0                       | 27.1 | 15.3 | 6.1                        | 19.2 | 12.6 |

しているのであろう。

要するに、子どもの日常の生活行動においては適切な配慮がなされ、習慣づけがきちんとゆきとどいており、小さな紳士の姿さえほうふつとするのである。いや、あまりに紳士的にすぎるのではないか——そういう疑念がうかばないでもない。

#### あそび文化

子どもにとって、あそびは生活そのものである。おとなにとってはレクリエーションであり、気晴らしであろうが、子どもの場合は、自分のもっている可能性や社会性発達の場合である。ひとことでいえば、パースナリティ形成の場合であり、円熟したおとなになるためには、子ども時代によく(よいという意味もふくめて)あそばねばならぬだろう。

ニュータウンの子どもたちの間では、どのようなあそびの文化が形成されているのであろうか。まず、あそび集団から調べてみよう。11月中旬のある1日、帰宅後のあそび相手を調べたのが表26である。香里の子どもたちは、男子も女子も、帰宅してからも近所の友人とあそぶことはあまりなく、同級生同士さそい合っあそぶようだ。念のため、へいぜいのあそび仲間をチェックしてみると、表27の通りである。主なあそび仲間をダブルで記入させているので、合計は100%をこえているが、これをみると、ニュータウンでは、同級生でつくられる仲間集団が一般的であることがわかった。

その理由についてはいろいろ考えられるが、何しろ校区がせまく、同級生の家



表26 ある日の帰宅後のあそび仲間 (単位%)

| あそび仲間     | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|-----------|--------|------|------|--------|------|------|
|           | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 同 級 生     | 44.8   | 27.9 | 28.3 | 34.1   | 22.5 | 20.8 |
| 近 所 の 友 人 | 6.9    | 25.0 | 18.6 | 14.1   | 20.2 | 24.0 |
| 兄 弟       | 12.6   | 22.0 | 14.2 | 21.2   | 21.3 | 22.9 |
| ひ と り     | 33.8   | 25.0 | 21.2 | 36.5   | 28.1 | 24.0 |

表27 帰宅後のあそび仲間 (単位%)

| あそび仲間     | 男 子    |      |      | 女 子    |      |      |
|-----------|--------|------|------|--------|------|------|
|           | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュータウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| 同 級 生     | 69.3   | 49.1 | 45.6 | 60.6   | 43.2 | 35.4 |
| 近 所 の 友 人 | 33.3   | 55.7 | 49.1 | 32.5   | 54.5 | 50.5 |
| 兄 弟       | 30.7   | 34.0 | 27.2 | 48.8   | 27.3 | 24.2 |
| ひ と り     | 18.7   | 26.4 | 22.8 | 32.5   | 38.6 | 27.3 |

が近接しているためにさそいやすいことがある。また、同じ年頃の若い夫婦が同時期に入居したために、隣近所に同級生が多いこともあろう。農村地域などでは年長の子どもが大将になって、配下を集めてあそぶという風景がよくみられるが、そういう中心になるような年長の子どもがいないという事情もあるかも知れない。

それはともかく、集団構成のしかたが異なると、集団の機能や文化が異なってくることは充分予想される。つまり、子どもたちのあそび方（あそび文化）が違ってくるのである。いま、子どもたちに好きなあそび3種を自由記入させ、地域ごとにそのベスト10までをとってみると、香里の子どもたちは、他の地域とは異なった特徴をもっていることがわかる。すなわち、男子の場合も女子の場合も、好きなあそびベスト10の中に、より多くスポーツがはいってくるのである。

男子の場合、ニュータウンでは6種（ドッジボール33.3%、野球25.3%、ソフトボール19.5%、サッカー13.8%、ポートボール9.2%、鉄棒9.2%）もあるのに対し、近郊農村では3種（ドッジボール34.6%、ソフトボール17.0%、野球14.4%）、大阪市内でも3種（鉄棒15.9%、ドッジボール15.9%、野球15.9%）である。

一方女子の場合は、ニュータウンで4種（ドッジボール28.2%、バレーボール18.3%、ポートボール15.3%、サッカー8.2%）、近郊農村は2種（ドッジボー



ル34.8%、鉄棒6.7%）、大阪市内でも2種（鉄棒17.7%、ドッジボール6.3%）である。

このように、子どもたちの好きなあそびが、スポーツやスポーツ的なあそびに傾く原因のすべてが、同級生同士による仲間集団の構成ということにあるのではもちろんない。ニュータウンの地理的、地形的条件、あそび場所や施設、用具…など、さまざまな条件が重なり合っているのだろう。だが、集団構成はその中心的な役割を担っているのではないか。

例えば、農村などでは、隣近所や部落の中であそび集団が形成され、その中には小さな子どもから大きな子どもまで、さまざまな年令の子どもが包摂されている。年長の子は小さな子を「みそっ子」「ごまめ」「はいご」などと名づけて、集団の中に組み入れてやり、いたわったり鍛えたりしながら、いろいろなあそび方や技術を伝達していく。あそびの文化を伝達された子どもたちは、やがて大きくなり、自分たちで改良したり、新しく発明した技術や知恵をつけ加えて、また次の世代に伝達するというしくみなのである。近所の子どもたちで構成されるあそび集団の中には、たてのパイプが通じており、あそび文化はそれを通して世代から世代へとコミュニケーションされ、子どもたちの世界に残りつづけていくわけだ。

ところが、近所や部落でまとまった集団がなくなり、同級生同士のあそび仲間が一般的となってくれば、その事情も変ってくる。年長の子とも年下の子どもの間をつないでいく文化のパイプは衰弱し、文化伝達は断絶に近い状態となるのではないか。あそびの方法や技術が伝達されないとすると、同級生同士でのあそびは、しぜん学校で習ったでき合いのスポーツ的なものに傾かざるを得まい。そして、自分たちの仲間で発明したあそびや開発した技術があったとしても、文化としてそれを次代に伝達していくチャンネルがないのである。そういった状況のもとでは、あそびの一時的な流行はあっても、文化としての継承はなくなってしまいうであろう。

もちろん、スポーツのもつ意味は決して軽くはなく、そのルールや役割学習の効用は充分認められるが、子どもたちの世界にインフォーマルな形で継承されつづけてきたあそび文化が途絶えることは、子どもたちのパーソナリティ形成にとって重要な問題をもっているのではなからうか。

もっとも、これはニュータウンばかりの問題ではなく、一層の都市化現象と交通ラッシュが進行している都会地でも同様の問題がおこってきているし、農村でさえも例外ではなくなってきた。が、いまその問題にふれていては道をふみはずしてしまうことになる。話をもどそう。



あそびの集団や文化のあり方と関連し合って、そしてまた、ニュータウンにおける地理的条件や校区の狭さの影響もあって、ニュータウンの子どもたちの行動半径は、男女とも非常に小さいようである。表28は、歩いていった時間からみた

表28 ある日の行動圏（歩行）

| 行 動 圏 |               | ニュータウン | 近郊農村  | 大阪市内  |
|-------|---------------|--------|-------|-------|
| 男 子   | 30分以上の行動圏をもつ者 | 2.2%   | 9.8%  | 12.4% |
|       | 最大の行動圏        | 60分    | 120分  | 90分   |
| 女 子   | 15分以上の行動圏をもつ者 | 3.6%   | 15.7% | 16.6% |
|       | 最大の行動圏        | 20分    | 60分   | 40分   |

行動圏の比較を示したものである。農村のように、隣り村との境の川へ魚釣りにいくとか、お宮の森へ集って忍者ごっこをやろうということがないからであろう。近くに施設のととのった遊園地や公園がある上に、閉鎖的なニュータウン社会の条件が、子どもたちに心理的な狭い境界を設けてしまうのであろうか。

これは、あそび文化ではないが、行動圏とあそびにかかわっている問題として、子どもたちのおとなの職業認知がある。子どもたちが、日頃実際にみているおとなの職業について書かせてみると、香里の子どもたちは少し違った傾向をあらわす。まず、他の地域の子どものあげる職業と大きく違うのは、「先生」と「文具屋」が非常に高い比率であげられることである。ニュータウン内のマーケットとわずかの店舗をのぞいては、おとなの働いている様子をまのあたりにみることでできない子どもたちは、まず先生と文具屋を思いつくりやすい。さらに、他の地域でみられないのは「会社員」「公務員」という一般的な職業分類の名称をかなりの子どもたちがあげることだ。つまり、そういう形でしかおとなの職業を認知することができない子どもが多いということである。そして、頭がよく、文化受容が豊富であるだけに、たくさんの職業名をあげるが、どうもマス・メディアその他を通じて得た知識にもとづいている傾向がみられる。それは、日頃実際にみているはずのない「航空乗務員」「スチュアデス」「タレント」「アナウンサー」「画家」「マンガ家」などがあげられてくることに端的に示される。

子どもたちは、あちらこちらとあそびまわりながら、おとなが実際に仕事にたずさわっていたり、働いている様子を間近にみききし、眺めいり、人はどのように社会にかかわっているものかを実感として知るのではなからうか。そうだとすれば、働らく人の姿をほとんどみられない消費・休養型のニュータウン社会は、この点においても、子どもの発達に関して考えるべきひとつの問題をもっているようである。



## 5 子どものパースナリティ形成からみたニュータウンにおける問題点

団地新聞などに目を通して見ると、団地はすばらしい、こんなところで子どもを育てられるのはとても幸せである、といった意味の投稿をよくみかける。団地やニュータウンに住む母親は、一般に、子どもの人間形成の場としてニュータウンをどう考えているであろうか。

表29は、それぞれの地域の母親たちが、いま住んでいる地域を他と比較して、子どもの「人づくり」の環境としてどう評価しているかを調べたものである。ここにみられるように香里の母親たちは、いま住んでいるところを非常に高く評価している。「大へんよい」「どちらかといえばよい」を合わせると、6割近くの人がよい環境だと考え、他の地域と大きなひらきがある。最近の大きな団地やニュータウンでも、大体同じような結果がでるだろう。

表29 人づくりの環境としての評価 (単位%)

|            | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
|------------|------------|------|------|
| 大 へ ん よ い  | 23.7       | 9.9  | 12.7 |
| どちらかといえばよい | 33.6       | 13.9 | 20.6 |
| ふ つ う      | 36.6       | 66.3 | 57.6 |
| あまりよくない    | 6.1        | 7.0  | 8.2  |
| わ る い      |            |      | 0.3  |

なるほどニュータウンは近代的で、きれいで、生活程度もかなりよく、文化程度も高い。遊園地はととのっており、交通事故の心配もなく学校も立派、子どもたちはみんな優秀……。そういう面もありはするが、

いままで検討してきたところからでも、問題はそう単純ではない。最後に、子どものパースナリティ形成から、ニュータウンにおける問題点を次の3つにまとめてみよう。

### (1) 直接経験の幅のせまさ

3章において考察したように、ニュータウンは近代的、合理的で、文化・教養度は高いが、閉鎖的で同質的である。また、消費・休養的な要素の優越する、多様性の乏しい社会でもある。非常にかたよった特殊な社会なのだ。したがってそこに住むというだけで、生活経験はかたよったものになるわけだが、子どもたちの日常の行動圏をみると非常にせまい。自分の家を中心としたせまい範囲で、同級生とスポーツやスポーツ的あそびをやるか、そうでなければひとりであそぶというわけだ。これでは、子どもたちの直接的な経験の幅はますますせまくならざるを得ない。

しかも、マス・メディアを中心とする文化受容は豊かで、知的であり、両親の



教養度は高く、教育的配慮は充分だ。直接的経験の土台の弱いところへ、間接的な文化受容によって大量の知識がつみ重ねられるため、その間に分裂が生じやすいという状況がある。つまり、頭でっかちなのだ。したがって、おとなの職業認知の調査で、テレビでみて頭の中で知っている職業があげられたり、テレビでみて「苗代」の知識はよくもっているが、ニュータウンの入口の田んぼにつくられた実際の苗代を、それが何だかわからなかったりする。直接経験こそは、創造力やイマジネーションの土台であり、その土台が貧弱であっては知識は思想としての力をもつことはできないのである。

直接経験の幅のせまさは、ニュータウンにおける子どものパースナリティ形成と教育の重大な問題点のひとつであろう。

この問題を解決するには、まずなんといっても、建設計画の面で、ニュータウンが単一的、同質的な社会に傾かぬような配慮が望まれる。そして、教育、すなわち学校教育、社会教育（校外生活指導）、家庭教育の面においては、子どもたちの生活経験をひろげ、豊かにすることを図る必要がある。行動圏を拡大するような指導が考えられねばならない。かりにも、直接経験の幅をせばめるような干渉やおしつけがあってはならぬであろう。

## (2) あそび文化の貧弱さ

4章でのべたように、ニュータウンの子どもたちのあそび文化は貧弱になる傾向がある。ニュータウンと周辺地域との文化的落差が大きく、閉鎖的になりやすいとすると、文化伝統のコミュニケーションは困難となる。ニュータウンほどの規模の大きなものとなれば、子どもたちは学校にいても、あそびの知恵も技術も乏しい同じニュータウンの子どもとしか接触できない。しかも、帰宅してからあそび仲間も同級生中心なのである。あそび文化の継承と伝達は非常に困難な状況にあるのだ。

子どもの世界にインフォーマルに伝達されてきたさまざまなあそび、変化応用のきく、完成品でないあそびは、子どもたちのパースナリティ形成にとっても重要な役割を果たしてきたのではないか。ここで充分にのべる余裕はないが、あそびの中で発揮され、養われる創造力、イマジネーション、自発性ならびに独立性はパースナリティの中核にかかわる重要な要素である。また、いろいろな年令や境遇の友人と交わることによって得られる社会性や人間理解、一見危険にみえ乱暴にみえるあそびからも、子どもたちは、活動性や積極性、手足の器用さ(巧緻性)を体得しつつあるにちがいないのだ。

スポーツの効用は、今さらとりたてていうこともない。ここでいいたいのは、



ニュータウンにおいて衰弱するおそれのあるあそび文化の意味を考え直し、その継承伝達の方法を考えねばならぬということである。それは子どもたちの校外指導、集団活動、子ども会活動における重要なポイントであり、学校教育も家庭もこのことを充分考えてみなければなるまい。

また、ニュータウン当局は、樹に登ってはならぬ、芝生に入ってはならぬ、柵をのりこえてはならぬ、穴を掘ったり草花を折ったりする子どもがいる……と監視の目をきびしくしているようだが、子どもは草花や樹を眺めて育つのではない。その中に没入し、身体でかかわることによって成長するのである。管理の方法も、子どもたちの遊び文化の育成という観点からも配慮する必要があるのではないか。

このことは、遊園地づくりにもいえることだ。いまのそれは、工夫はこらされているがあまりに人工的にすぎ、完成されすぎている。子どもたちの働きかけの意欲や創造を刺激するようなものであり、もっと変形のきくものであることが望ましい。ニュータウン自体が人工的、規格的なのだから、なおのことそれが必要なのである。

### (3) 女性文化的生活

ニュータウンでは、他の地域に比して、子どもたちの生活習慣づけがゆきとどいていることは前にふれた。規則正しい生活をし、適当に睡眠をとり、勉強をよくするのである。テレビも、マンガやアクション番組を少なくして、教養番組や内容の高いものをみるように心がける。読書もよくする。勉強が終ると、ユニホームを着たり、高級な運動用具を使ってスポーツをやる。友だちと話し合っていることばもきれい。小さな紳士のような生活である。

しかし、子どもというものはそんなものだろうか。樹にのぼってゆきぶったり、高いところからとび降りる競争をしたり、蛇をたたき殺したり、ケンカをしたり、卑猥な歌を大声でうたったり、徒党を組んで遠征したり…そういうワンパクな側面を多分にもっているのではないか。社会化 (Socialization) の程度が低いだけに反体制的であり、乱暴であり、非情である。だが、それだからこそ、生き生きとした表現や創造、大胆な行動性、頼もしい可能性を感じさせるのだ。表30は、親や先生に禁じられたあそびの経験の有無を示したもののだが、ニュータウンの子どもがいかにおとなしく、ききわけがよいかがわかるだろう。

ニュータウンのような地理的条件の中では、身をかくす露路裏や秘密のたまり場はない。誰に気がねすることなく、大声をはりあげ、自由に行動することのできる解放された場所もない。行動圏はせまく、周囲の目もうるさい。教育的な観点からしつけに心を配る母親の磁場の中に、ちんまりとおさまっているという感



表30 禁じられたあそびの経験

(単位%)

| あそびの経験 |   | 男 子        |      |      | 女 子        |      |      |
|--------|---|------------|------|------|------------|------|------|
|        |   | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 | ニュー<br>タウン | 近郊農村 | 大阪市内 |
| な      | い | 60.0       | 33.0 | 45.6 | 91.3       | 72.7 | 84.8 |
| あ      | る | 40.0       | 67.0 | 53.5 | 8.8        | 26.1 | 14.1 |

じである。

したがって、子ども時代の楽しい生活のひとつである箸のおこずかいの使い方にしても、ニュータウンの子は、買う前によく両親に相談をし、買ったものについては意見をいわれる。おこずかいは自由に使ってよいものだとあまり考えておらず、それでお菓子を買ってしまうなんていう子は少ないのだ。縁日や夜店でスルメのアメだきをかじったり、かんと煮を食べたり、綿菓子をほぼぼったりという楽しさが味わえないのは、やはり淋しいことではなかろうか。

子どもの生活時間におけるニュータウンは、女性の支配するくにである。教養が高く、生活がきちんとしていることはよいことだが、あまりに女性文化的ではないか。よい子ではあるが、たくましさが感じられない。家庭教育の面で、このことを充分考え直してみる必要があろう。そして、ニュータウンという特殊な環境の中にある学校は、そういう意味でも、他の地域の学校とは異なった機能を果たさねばならない。

スケールが大きく、野性的で、たくましい子どもづくり、それはニュータウンに関係するすべての人が考えてみなければならぬ大きな問題であろう。